もあるは、錢を兩掌の内に持てよく念じて擲ち、其なめとかたとのあらはれたるをもて、勝負する事なるべし、

○

〔和漢三才圖會十七 嬉戯〕意錢　和名世邇宇知、俗云穴伊知、穴擊之訛乎、

一種地堀穴、大可容錢、而覘穴擲錢、入穴者爲自得取之、穴外錢任敵請擊之、中則爲勝、其餘如上法、○意錢　近世有鍋島、開保、六道等數品、皆與擊壤同趣者也、

〔嬉遊笑覽四 雜伎〕穴一は元隣が寶倉に、花見の處幕のこかげには、雙六のどう〳〵とふりならし、ぢやうさいとこのみ、穴一のあなかしましき聲たてゝ、われ一との、ゝ云り云々、これ雙六のことにいひたれば、穴一は采の目なるべし、一の采は目の穴の如くなれば是をいふか、よりて此戯もそのやうに穴の似たれば、名づくるなるべし、嘉良喜隨筆に、穴一外へ出るを左遷といふ、流さるゝ心なり、始め誰が敎たるぞ、其碩が賢女心粧一、をのこのすなる石取、穴一などの似合ざる惡遊び云々有る、長崎歳時記正月二日條に、此日は、○中略下賤の輩はスホ引、ヨセ、ケシ、カンキリ、カラバ、筋打などして、樂むものあれども、右は博奕に似たるとて、親々堅くこれは禁ずるもあり云々、この下に圖說あり、スホ引は寶引なり、ヨセ以下はみな錢を投る戯れにて、カンキリは常の穴一、カラは一名穴ボンと云は、穴の廻りにわをかきたり、筋打は江戸にてキズと云もの也、ヨセは小き木を地に立て、錢を投るに、その木の本によるをよしとす、ケシは地にうづ卷をかき、投る錢その正中によるほどを勝とす、うつ錢をハツソウと名付、二文又は三文を、飴をもてかさねつける、ハツソウは蠻語かといへり、古錢家に繪錢の厚きものを、福一玉と云る是なり、物類稱呼に、劵螺相州三浦にてつぼがいと云ふ、さゞえのふたをとうもいちといふ、是は童部の戯玩に、穴一といへる事をすなり、浦里にてあれば、錢のかはりに用るものかと云り、按に、とうもいちとは、投壺を和名にとなげとあるとなるべく、